

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月21日現在

機関番号：13802

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520504

研究課題名（和文）時制の語用論—中英語から初期近代英語への発達

研究課題名（英文）The pragmatics of tense: The development from Middle English to Early Modern English

研究代表者

中安 美奈子 (NAKAYASU MINAKO)

浜松医科大学・医学部・准教授

研究者番号：80217926

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、語用論的な観点から時制の中英語から初期近代英語への発達を分析することである。時制には言語使用者や文脈等の要因が密接に関わっているにもかかわらず、歴史的なデータにおいては、語用論的な分析はこれまで殆どなされてこなかった。本研究においては、言語行為等のミクロなレベルに留まらず、会話や談話等のマクロなレベルに踏み込んだ検討を行い、時制の意味や機能が歴史的にどのように発達してきたのかを体系的に分析した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research project was to analyse the development of tense systems from Middle English to Early Modern English from the viewpoint of historical pragmatics. Although tense is closely related to factors such as speakers and context, few pragmatic analyses have been conducted. The present research investigated not only micropragmatic factors but also macropragmatic dimensions such as dialogue and discourse, and conducted a systematic analysis of how the meaning and function of tense developed in history.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語史・時制・中英語・初期近代英語・歴史語用論

## 1. 研究開始当初の背景

我々の世界では時は一定の速さで流れ、数限りない事象が生起しているが、その中からどの事象を選択し、どのようにそれを言語化するのかに、話者は責任を負っている。時制（テンス）(tense)とは、言語において時間を具現化し、話者がどのように時間や事象を見ているのかを表現する文法カテゴリーである。過去の話者はどのように時制の意味機能を捉えていたのだろうか。また、それは歴史の中でどのように変化したのだろうか。話者の捉え方を重視したこういった見方は、まさに語用論の研究領域と言ってよい。

語用論的な視点から歴史的なデータを分析する試みは、新しい分野にまとめられ、歴史語用論 (historical pragmatics) が誕生した (Jucker 1995)。書かれた歴史的なデータを分析することを得意とする歴史言語学と話された言葉を主に分析する語用論との融合という、画期的な試みである。過去に話された言葉を直接観察することができないという「データの問題」があったが、話し言葉性といった観点から、現在ではおおむね解決をみている。

時制には語用論的なファクターが密接に関連していることが明らかであるにも関わらず、歴史的なデータにおける時制の語用論的な側面は、以下に掲げるように十分に研究されてきたとはいえなかった。

- (1) 語用論的なファクターが統語論という名の下に他のファクターと一緒に区別されずに分析されている
- (2) そもそも語用論的な観点からなされた分析が極めて限られている
- (3) 分析されているとしてもマイクロ語用論的な次元に留まっており、マクロ語用論的な次元は分析されていない
- (4) 話者の情報が得やすい初期近代英語は比較的手が届きやすいが、中英語となると語用論的分析はより難しい

このような状況を踏まえ、研究代表者のこれまでの研究実績を拡大・発展させる形で、本研究の目的と方法を設定した。

## 2. 研究の目的

本研究プロジェクトの目的は、歴史的なデータにおいて時制の語用論的側面がどのように発達してきたのかを分析することである。中英語 (Middle English; 1100年頃—1500年頃) と初期近代英語 (Early Modern English; 1500年頃—1700年頃) の共時的な

時制体系を分析し、これらの時代間の発達がどのようなものであったのかについて検討した。

分析にあたっては、語用論的な分析で最も重要といえる話者と発話の状況 (今・ここ) を重視した。時制の選択にあたっては、話者はこの地点から時間的に、社会的に、心理的にどの程度離れているのかを判断し、言語表現を選択する。すなわち、話者基準的な見方 (ダイクシス) を採用した。

従来の研究ではしばしば混同されてきた統語論的、意味論的、語用論的ファクターを厳密に区別し、特に次のファクターについて検討した。

- (1) 意味論的なファクターであるモダリティとの関連
- (2) ミクロ語用論的なファクターである言語行為
- (3) よりマクロ語用論的なファクターである (イン) ポライトネス、会話や談話、社会的・文化的ファクター
- (4) その他のファクター (感情的なものなど)

分析の対象とした時制は、非過去時制と過去時制の両方である。これらの時制はすべて特定の言語形式で表されるというわけではなく、法助動詞のように迂言的な言語形式をとる場合もあることに注目した。すなわち、未来時を表すことができる SHALL や WILL、過去時を表すことができる WOULD や SHOULD (それぞれ必ずしも未来時や過去時とは限らないことに注意) である。これらはモダリティとオーバーラップする領域であり、モダリティとの関連で歴史的に変化したであろうことが、研究代表者のこれまでの研究からも予測できた (Nakayasu 2009)。

## 3. 研究の方法

歴史言語学と語用論のインターフェースを目指す歴史語用論の方法論として、理論とデータの記述のバランスがとれるよう、量的な分析と質的な分析の両方からアプローチを行った。

歴史語用論においては、二つの対応づけ (マッピング) の方向が想定されている (Jacobs and Jucker 1995)。

- (1) 言語形式に着目してそれに対応する機能を分析する「形式—機能の対応づけ」
- (2) 機能に着目してそれに対応する言語形式を分析する「機能—形式の対応づけ」

本研究の最も顕著な特徴の一つとして、この二方向の対応づけを採用した点がある。前項で述べたように、時制はすべてが特定の言語形式で具現化されるとは限らない。法助動詞に着目する場合は比較的コーパスの検索は容易であるが、動詞(句)に内在する時制を検索する場合は著しく困難である。また、形式と機能の対応が歴史的に変化している可能性があった。二方向の対応づけの採用により、時制の発達を語用論的に分析することがより精密にできるようになった。

このような方法論を採用したことから、コーパスの範囲を絞る必要があった。リヴァーサイド版のテキストを利用し、それに準拠したコンコーダンスを補助的に使用した。

(1) *The Riverside Chaucer* (Benson 1987); concordance by Oizumi (1991-94) (Middle English)

(2) *The Riverside Shakespeare* (Evans 1997); concordance by Spevack (1968-80) (Early Modern English)

これに Visser (1963-73) や Fridén (1948) などの歴史言語学・文献学に関する先行研究からのデータと分析結果を組み入れた。

なお、研究代表者は、国際学会参加の機会を捉えて、あるいは直接出向いて国内外の研究者との交流を行った。特にヤツェック・フィッシュ教授(アダム・ミツケビッチ大学、ポーランド)から得られたレビューは大きな収穫であった。

#### 4. 研究成果

三年にわたる研究により、歴史的なデータにおける時制の体系やその発達を体系的に分析したことは、他に類をみないものであり、この分野の発展に寄与したと確信している。本研究は、次の点において特に大きな意義があったと考えられる。

(1) 時制に関する分析は、それまでの歴史言語学でもある程度行われてきたが、断片的で未整理であり、これらに新たな知見を加えて体系的に提示したこと

(2) 歴史語用論の立場から理論的・実証的に時制の体系やその発達を捉え直したこと

(3) 混沌としていた統語論的・意味論的・語用論的ファクターを明確に区別し、分析を行ったこと

(4) 時制にはさまざまな語用論的なファクターが関係しているが、マイクロ語用論的なファクターに留まっていた分析を、マクロ語用論的な次元にまで踏み込んで行ったこと

(5) 「形式—機能の対応づけ」「機能—形式

の対応づけ」の二方向の対応づけにより、綿密な分析を行ったこと

次に本研究の最も顕著な成果として、次の二件をあげておきたい。

##### (1) 未来時を表す法助動詞

ともに未来時を表す SHALL と WILL の意味論的・語用論的ファクターの比較を行い、その歴史的発達を検討した。モダリティに関しては、予測通り初期近代英語において(より主観的な)認識的モダリティの割合が高かった。言語行為については、中英語のパラエティがより限定されていた。また、モダリティと関連する言語行為が遂行される割合が、モダリティの割合と連動していた。SHALL と WILL の交替を会話や談話において分析してみると、モダリティ、会話や談話に関するファクターのみならず、感情的・社会的・文化的ファクターによっても談話における交替が行われるということがわかる。重要なことに、初期近代英語において、なぜいづれかの法助動詞が使用されているのかを説明するのが難しい例が増加する。これは、未来時制とほぼ同じ意味機能をこれら法助動詞が備えるようになったことを意味する。すなわち、意味論のカテゴリーであるモダリティから、(話者基準的な見方をすれば)語用論のカテゴリーと言ってよい時制へと発達してきたことが実証されたのである。

##### (2) 非過去(現在)時制と過去時制の交替

過去時を表す語りの中で、過去時制に加えて非過去(ここでは現在)時制が使用されることがある。いわゆる歴史的現在といわれる現象である。初期近代英語のコーパスにはほとんどみられないが、中英語にはしばしばみられる。このような過去時制と現在時制の文脈における交替について意味論的・語用論的な分析を行った。意味論的なファクターとして、動詞句のアスペクト特性と時制の選択との関係を分析したが、有意な差はみられなかった。話者基準的な表現、ディスコース・マーカ―は、時制の選択と密接に関連するが、中英語ではパラエティが限定されていることが示された。また、語りの構造、談話の構造(メタディスコースを含む)を明らかにし、そのなかでどのように時制が選択されるかを分析した。そして、談話において話者の「今・ここ」に過去の事象を同期させる方法やその語用論的なファクターを解き明かすことができた。

以上の分析・考察から、話者が効果的に時制の意味・機能を考慮に入れてその選択を行

っていることが裏付けられ、時制体系の通時的な発達に関する貴重な示唆を得ることができた。

次節に発表論文や口頭発表のリストを掲げたが、まだ掲載していない準備中、投稿中の論考があるため、今後も成果を社会に発信していく努力を続けていきたい。また、本研究で得られた知見が今後の研究プロジェクトへ道をひらく可能性がおおいにあるという確信も得られた。

最後に、本研究では、言語事象の記述や説明に重点を置いたが、いったい何が変化や発達の原動力になったのかという問いには答えられていないままである。ぜひ今後の研究課題としていきたい。

Benson, Larry D. (ed.). 1987. *The Riverside Chaucer*. 3rd edition. Boston: Houghton Mifflin Company.

Evans, G. Blakemore (ed.). 1997. *The Riverside Shakespeare*. 2nd edition. Boston and New York: Houghton Mifflin Company.

Fridén, Georg. 1948. *Studies on the tenses of the English verb from Chaucer to Shakespeare: With special reference to the late sixteenth century*. Uppsala: Almqvist & Wiksell.

Jacobs, Andreas and Andreas H. Jucker. 1995. "The historical perspective in pragmatics", in Andreas H. Jucker (ed.), 3-33.

Jucker, Andreas H. (ed.). 1995. *Historical pragmatics: Pragmatic developments in the history of English*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Nakayasu, Minako. 2009. *The pragmatics of modals in Shakespeare*. Frankfurt am Main: Peter Lang.

Oizumi, Akio. 1991-1994. *A complete and systematic concordance to the works of Geoffrey Chaucer*. Hildesheim and New York: Georg Olms Verlag.

Spevack, Marvin (ed.). 1968-1980. *A complete and systematic concordance to the works of Shakespeare*. Hildesheim: Georg Olms Verlag.

Visser, Frederik Th. 1963-1973. *An historical syntax of the English language*. Leiden: E. J. Brill.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

1. Nakayasu, Minako. 2011. "Towards a pragmatic analysis of modals SHALL and WILL in Chaucer's language". *Studia Anglica Posnaniensia* 46(4): 73-96. [査読有]
2. Nakayasu, Minako. 2010. "Modals 'shall' and 'will' in Shakespeare: A discourse-pragmatic analysis". In Y-S Kang, etc. (eds.), *Universal grammar and individual languages (SICOL-2010)* (CD-ROM). Seoul: Hankookminhwasa. [査読有]

[学会発表] (計10件)

1. Nakayasu, Minako. *Shrighte Emelye, and howleth Palamon: Tense alternation in Chaucer*. 17th International Conference on English Historical Linguistics (ICEHL-17). University of Zurich, Zurich, Switzerland. 2012年8月発表予定.
2. 中安美奈子. チョーサーにおける時制交替—歴史語用論の視点から. 学習院大学人文科学研究所講演, 学習院大学. 2012年3月29日.
3. Nakayasu, Minako. Pragmatic development of the modal and temporal systems in English. 第6回浜松医科学シンポジウム, 浜松医科大学. 2012年2月24日.
4. Nakayasu, Minako. Chaucer's historical present: A discourse-pragmatic perspective. 10th Medieval Studies Symposium (MESS 10), Adam Mickiewicz University, Poznań, Poland. 2011年11月19日.
5. Nakayasu, Minako. How can modals be analysed in discourse? A diachronic perspective of the modal and temporal systems in English. Developing Corpus Methodology for Historical

Pragmatics, Helsinki Corpus Festival,  
University of Helsinki, Helsinki,  
Finland. 2011年9月28日.

6. Nakayasu, Minako. *How wol I tellen my Fourthe housbonde*: How did Chaucer use modals in discourse? 7th International Conference on Middle English (ICOME 7), Ivan Franko National University, Lviv, Ukraine. 2011年8月3日.
7. Nakayasu, Minako. Towards a pragmatic analysis of modals SHALL and WILL in Chaucer's language. 9th Medieval English Studies Symposium (MESS 9), Adam Mickiewicz University, Poznań, Poland. 2010年11月21日.
8. Nakayasu, Minako. Modals, speech acts and (im)politeness: A new look at interactions in Shakespeare's plays. 16th International Conference on English Historical Linguistics (ICEHL-16). University of Pécs, Pécs, Hungary. 2010年8月24日.
9. Nakayasu, Minako. Modals 'shall' and 'will' in Shakespeare: A discourse-pragmatic analysis. 2010 Seoul International Conference on Linguistics (SICOL-2010). Korea University, Seoul, Republic of Korea. 2010年6月24日.
10. 中安美奈子. シェイクスピアにおける法助動詞 SHALL/SHOULD、WILL/WOULD の意味と機能. 近代英語協会第27回大会. 京都大学. 2010年5月28日.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中安 美奈子 (NAKAYASU MINAKO)  
浜松医科大学・医学部・准教授  
研究者番号：80217926

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし